様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３１３０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００３７９

研究課題名（和文）古事物愛好主義（Antiquarianism）とイギリス・ロマン主義文学・文化

研究課題名（英文）Antiquarianism and British Romantic Literature and Culture

研究代表者
鈴木　雅之（SUZUKI, Masashi）

宮城学院女子大学・付置研究所・研究員

研究者番号：５００９１１９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：イギリス・ロマン主義時代の古事物愛好主義の特徴を古代ブリトン人、ドルイド教、ストーンヘンジ、古詩とバードの伝統、オシアン現象等に辿り、その政治的・歴史的・宗教的背景を明らかにした。古事物愛好主義的言説を精読し複雑な「古代」観を整理した。古代ブリテン時代のドルイド教とキリスト教の重層的な関係を探った。ブレイク個展作品のひとつ歴史画《古代ブリトン人》をこの絵画作品に付された作品解説を丁寧に読み解くことにより、ブレイク独自の古代ブリトン人観を明らかにした。ブレイクの宗教を論じる際に欠かせないスウェーデンの神秘思想家エマヌエル・スヴェーデンボリを取り上げスヴェーデンボリのブレイクへの影響を探った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古事物愛好主義の特徴は古代ブリテンの「過去」を掘り起こし再創造することである。イギリスの古事物・古代性に対する興味と関心が高まった17世紀から19世紀には、多くの古事物研究者・愛好者が生まれた。古事物愛好主義から生まれた多様な言説をイギリス・ロマン主義時代の文学と文化に探り、詳細な分析を行い領域横断的な考察を加えた。これによって、これまでは断片的で細分化されたものとして捉えられてきた当時の文学と文化の諸相を新たな統一的視点で読み解き、それらの諸相が緊密な相互依存の編み目を形成している様子を浮き彫りにすることができた。新しいイギリス・ロマン主義文学・文化像を提示した。

研究成果の概要（英文）：Eighteenth-Century and Romantic Age Britain saw an explosion of interest in its own past. Antiquaries, men interested in all aspects of the past, added new dimension to literature in Britain in their attempts to reconstruct and recover the past. Antiquarianism produced diverse discourses on Ancient Britons, Druids, Stonehenge, including such important primary sources as Paul-Yves Pezron, The Antiquities of Nations; Henry Rowlands, Mona Antiqua Restaurata, an Archaeological Discourse on the Antiquities, Natural and Historical, of the Isle of Anglesey; Aylett Sammes, Britannia Antiqua Illustrata; or, The Antiquities of Ancient Britain. Druidism in Ancient Britain is also a crucial issue in discussing antiquarianism. William Blake's The Ancient Britons, one of the most important history paintings in his one-man Exhibition in 1809, along with his detailed description of the lost picture, gives us important clues to the idea of Ancient Britons.

研究分野：英米文学

キーワード：古事物愛好主義　古代ブリトン人　ストーンヘンジ　イギリス・ロマン主義時代　古代ケルト民族　ウェールズ　古詩とバードの伝統　スヴェーデンボリ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1.　研究開始当初の背景

イギリスの古事物（antiquities）に対する関心は William Camden（1551-1623）の Britannia（ラテン語 版 1586; Edmund Gibson による英訳版 1695）の出版を機に高まり、古事物研究・愛好者協会が 1586 年に設立され 1616 年まで存続した。これが最初の隆盛期である。しかし 1717 年にロンドン古事物研究・愛好者協会が正式に設立されたことからも明らかなように、古事物愛好主義への関心は 18 世紀に入ってさらなる高まりをみせた。古代ブリテンの起源と歴史をめぐる言説が多数現れた。このような古代ブリテンに対する熱い眼差しの背景には、18 世紀から 19 世紀のナショナリズムの高まりがあったことを忘れてはならない。例えば、イギリス文学・文化のルーツをもとめた古事物愛好主義者たちは、古代に向かいそこに外なる西洋古典ではなく内なるイギリス古典作品を発掘あるいは捏造しようとした。その過程に決定的な影響を与えたのは、1707 年の合同法によりイングランドとウェールズにスコットランッドが連合することが決まりグレイト・ブリテン（イギリス）が誕生したことであった。過去を発掘し再創造すべく、未分化状態にあった歴史学や考古学、地質学等の母体としての古事物愛好が、18 世紀後半から 19 世紀半ばにかけてのイギリス・ロマン主義文学と文化（哲学、政治、宗教、遺跡、視覚芸術等）に及ぼした影響は計り知れないものがある。

イギリス・ロマン主義時代の古事物愛好主義的言説としてもっとも重要なのは、古代ブリテンの起源と歴史をめぐるものである。古代ブリトン人とは何者であったかと題されたパンフレットや論説が 18 世紀から 19 世紀にかけてきわめて多量に産出されたことが注目される。古代ブリテンの基礎をなすケルト文化やトドルイド教、ストーンヘンジ、ウェールズ文化の再興等に関わる様々な言説もまた古事物愛好主義に深く関わる。Thomas Chatterton, Thomas Gray, William Mason そして William Blake などによる古詩への関心や古代ブリテン像の再構築に関わる資料、そして思弁的神話作家論も古事物愛好主義から生まれた言説である。しかしながら不思議なことに、以上のような事実にも拘わらず、これまでの先行研究においては、古事物愛好主義といえば、文学作品に現れた古事物研究家・愛好家や古銭、教会や廃墟、古い地図や虫の食った古文書あるいは地方史への断片的言及にとどまるなどきわめて限定的であり、相互の関連性を踏まえることなく個別的議論を重ねてきたために緊密な連関性を見失い、その結果、個々のテクストの考察も洞察を欠くものとなった。多様な古事物愛好主義的言説は、文学テクストに限定されることなく、その背景をなす広く文化・民族・歴史に関わるイギリス・ロマン主義時代の精神風土の中枢を占めるものであった。

本研究の学術的背景は以上の通りであり、核心をなす学術的「問い」は何かと言えば、それは 「イギリス 17・18 世紀から 19 世紀半ばにかけて大量に産出された古事物愛好主義的言説が、ロマン主義時代という新しい文学・文化運動の形成にいかなる役割を果たしたか」ということになる。

2.　研究の目的

古事物愛好主義(Antiquarianism)の最大の特徴は古代ブリテンの「過去」を掘り起こし再創造することである。イギリスの古事物・古代性に対する興味と関心がとくに高まったのが 17 世紀か ら 19 世紀のことであり、多くの古事物研究者・愛好者（antiquary）

が生まれた。本研究課題の 目的と方法は、隆盛を見た古事物愛好主義から生まれた多様な言説とその影響を、18 世紀後半 から 19 世紀前半にかけてのイギリス・ロマン主義時代の文学と文化（哲学、政治、宗教、遺跡、視覚芸術等）の中に探り、古事物愛好主義を鍵概念として第一次資料の詳細な分析を行い、領域 横断的な考察を加えることである。そうすることによって、これまでは断片的で細分化されたものとして捉えられてきた当時の文学と文化の諸相を新たな統一的視点で読み解きき、それらの諸相が緊密な相互依存の編み目を形成している様子を浮き彫りにし、新しいイギリス・ロマン主義文学・文化像を提示する。これまで文学史的にイギリス・ロマン主義時代を定義するときは「自然、自由、革命、想像力」の時代と呼ぶのが一般的・常識的であり、そこに古事 物愛好主義が入る余地は殆どなかった。しかし上記 1 で述べたような視点からロマン主義時代を見ると、古事物愛好主義がいわばこれまでの研究の盲点であったと思える。例えば、ケンブリッジ大学に学んだ Wordsworth は西洋古典を手本にしてはいたが、その実、自国の文化への関心は非常に高く、地方史（これも古事物愛好主義）である Thomas Durham, *The History and Antiquities of the Deanery of Craven, in the County of York* (1805) が重要な彼の霊感源のひとつであったことには十分な注意が払われてこなかった。Blake 作品 *Jerusalem*（1804）には古事物愛好主義が通奏低音のように流れているにもかかわらず、長い Blake 研究史のなかで言及されることはあるにせよ、一貫して追及されたことはこれまでなかった。

本研究に類似した研究書は日本には見あたらないが、海外における最近の先行研究のひとつに Noah Heringman, *Sciences of Antiquity: Romantic Antiquarianism, Natural History, and Knowledge Work*（2013）がある。本書では「古代」とは擬古典主義、中世主義、グローバル博物学さらにギリシャ・ローマをも含むとされ、著者はそれぞれの領域における知もしくは知識の創造・形態を探る。本書の強みは、古事物愛好主義の応用範囲を拡げ、知の形態という興味深い視点を導入したことであろう。他方個々の分析に斬新な解釈が見られるわけでもなく「古代」の定義がやや曖昧で恣意的であるだけでなく、何よりも文学作品を扱っていないことが最大の不満である。古事物愛好主義の地道な跡づけがなされた、イギリス・ロマン主義文学・文化に関する学際的研究はきわめて少ない。

本研究の目的は、古事物愛好主義から生まれた多様な言説を精読しこれまで見過ごされてきた視点から、新しい切り口で領域横断的に個別テクストを詳細に分析することである。そうすることで、個々の分野を活性化し従来の固定化された視点からだけでは見えにくい文化のダイナミックな相貌を明らかにし、古事物愛好主義を鍵概念とする新しいロマン主義文学・文化の姿を浮き彫りにする。ここに本研究の学術的独自性と創造性がある。

3. 研究の方法

イギリス・ロマン主義時代の古事物愛好主義的言説――1.古代ブリトン人、2.ドルイド教、ストーンヘンジ、3.ウェールズにおける古詩とバードの伝統復活、ケルト民 族起源論、4.古代神話論、思弁的神話作家、オシアン現象、5.地方史等――に分類し、その政治的・歴史的・宗教的背景を明らかにする。これらの項目は、言うまでもなく、相互依存関係にある。この時代に広く読まれた Paul-Yves Pezron, *The Antiquities of Nations* (1706); Henry Rowlands, *Mona Antiqua Restaurata, an Archaeological Discourse on the Antiquities, Natural and Historical, of the Isle of Anglesey* (1723); Aylett Sammes, *Britannia*

Antiqua Illustrata; or, The Antiquities of Ancient Britain (1676); John Owen, *A Compleat and Imperial History of the Ancient Britons* (1743); Francis Grose, *The Antiquities of England and Wales* (1773-87)等を精読し、当時の「古代」観を押さえることが先ず第一に行うべき研究作業である。

古代ブリテンあるいはブリトン人の問題は、必然的にドルイド教やストーンヘンジと結びつ く。ここで重要な人物は William Stukeley である。彼の *Stonehenge: A Temple Restored to the British Druids* (1740)や *Abury: A Temple of the British Druids* (1743)は、ストーンヘンジがイギリス・ロマン主義文学 (Blake, William Collins, Gray など)に及ぼした影響の考察には欠くことができない。古代ブリテン時代のドルイド教とキリスト教の複雑な関係を探るには、古代ブリテンにおけるドルイド教とユダヤ教とキリスト教の起源を絡ませて考察することが必要だ。これに関連した必須文献としては、William Cooke, *An Enquiry into the Patriarchal and Druidical Religion, Temples, &... wherein, The Primaeval Institution and Universality of Christian Scheme is manifested* (1755); the anonymous *Complete History of the Druids...with an Inquiry into their Religion and its Coincidence with the Patriarchal* (1810); the anonymous *The Identity of the Religions called Druidical and Hebrew* (1829); D. James, *Patriarchal Religion of Britain* (1836) 等がある。これらの文献の精読を通して、遺跡や古代宗教に関する古事物愛好主義的言説と文学の多様かつ複雑な相関関係を明らかにする。

4. 研究成果

本研究課題のもとにおこなった研究の成果はシンポジュウム、研究発表、論文として公表した。本主題に関して「古事物愛好主義の系譜」と題したシンポジウムを日本ジョンソン協会大会（2021 年 7 月 10 日）において企画し研究発表を行った。その成果を「『幻想的な黙想』――ブレイクの古事物愛好主義的想像力」(『英文學研究 支部統合号』Vol. XIV、日本英文学会、139−47)として公表した。このシンポジウムは、以下の内容をパネリスト相互間の共通認識とした。つまり「古代ブリトン人とはなにものであったか？」と尋ねることは、18-19 世紀英国の古事物愛好主義者、作家、芸術家に彼らの歴史的想像力について質すことであった。古代ブリテンの起源と歴史に興味を抱き、国民として国家として歴史的自意識を獲得することは、この時代とくに 18 世紀後半におけるイギリスの歴史家、古事物愛好家、芸術家にとり最大の関心事であった。

この発表の中でとくに Blake と「古事物愛好主義」との出会いを、1772 年 8 月、当時 15 歳の Blake が銅版画師 James Basire 工房の徒弟になった頃に遡ると指摘した。また「古事物愛好主義」を巡る当時の議論を以下のように纏めた。古事物愛好主義者の総帥とも呼ぶべき William Camden（1551-1623）は、*Britannia*（1586）のなかで、ブリテン島の最初の住民は逃亡してきたトロイア人であるとする説を否定し、ガリア本土から移住してきたひとたちであったという説を取った。そしてブリテン島最初の住民は、ノアの第 3 子ヤペテの子孫たちであるキンブリー人であったろうと主張した。一方、古代ブリトン人はフェニキアの開拓者であったという説を主張したのは、Blake への影響も指摘される Aylett Sammes（1636?-79?）の *Britannia Antiqua Illustrata; or, the Antiquities of Ancient Britain*（1676）である。航海術に長けたフェニキア人こそが、「ブリテン島の古代文化」を形成したと Sammes は言う。Piggott によれば、17 世紀にはフェニキア人とヤペテ（ノアの第３子）の子孫とが、先史時代のブリトン人（古代

ブリトン人）の祖先とみなされるようになったとも指摘する。William Stukeley（1687-1765）は、イングランド南西部ウィルトシャー州ソールズベリー草原に立つ巨石建造物・ストーンヘンジ、同じくブリストル東方の村エイヴバリーに残る環状列石遺構について自説を展開した。Stukeley によれば、最初にブリテン島に移住してきたのはフェニキア人とドルイド（ケルト人の神官の総称）であった。それはノアの大洪水の後、アブラハムの存命中のことであったという。彼らは完全にアブラハムの宗教を信じていた。ストーンヘンジはアブラハムの宗教（ユダヤ教）を受け継いだドルイドによる神殿であると Stukeley が発表して以来、この巨石建造物をドルイドそしてケルトと結びつける動きは止まらなくなった。Stukeley による言説がスタンダードなものと認識されるようになった。ストーンヘンジやドルイドについて Blake は、基本的なところ Stukeley らの言説を受け継いだと考えられる。

以上のような文脈の中で論文「『幻想的な黙想』――ブレイクの古事物愛好主義的想像力」は、Blake 個展作品のひとつ *The Ancient Britons*（1809; 所在不明）と題された歴史画をとりあげ、この絵画に Blake が付した長い作品解説・作品描写を精読することによって、Blake の複雑な古代ブリトン人観つまり「古事物愛好主義」の特徴を明らかにした。*The Ancient Britons* の作品解説を精読することによって、Blake による広い意味での古事物愛好主義への過激でしかし複雑な関与の仕方を検討し、とくに古代ブリテンの「起源」を巡る Blake の姿勢、それがどのような意味をもっているのかを考察した。

本研究課題と関連するもうひとつの研究成果は、Blake と Swedenborg を取り上げた論文「“foundations for grand things”――ブレイクとスヴェーデンボリ」（『東北ロマン主義研究』第 6 号, 2019 年. 39-55）である。18 世紀後半から 19 世紀半ばにかけて、ヨーロッパのみならず大西洋の両岸において幅広く受容されたスウェーデンの神秘思想家 Emanuel Swedenborg（1688-1772）の熱心な支持者であった Blake ではあるが、*Marriage of Heaven and Hell*（1790-93）の中で Swedenborg を厳しく批判した。これまでの Blake 研究では、そのことだけが特化されて論じられがちであった。しかし Blake は、1809 年開催の Blake 個展カタログである *A Descriptive Catalogue of Pictures*（1809）のなかで、Swedenborg の著作は画家と詩人たちの注目に値する “foundations for grand things”と書いたことは、言及されこそすれその真意が十分に考察されたことはなかった。

論文「“foundations for grand things”――ブレイクとスヴェーデンボリ」において、Swedenborg を出典とする個展展示作品第 8 番 *The spiritual Preceptor*（1809）に Blake が付した「作品解説」と、そのなかで Blake が言及する Swedenborg の *True Christian Religion*（1781）とを併せて考察することにより、Blake が Swedenborg のどこに関心を持ちこの個展絵画作品を描こうとしたのかを論究した。そのヒントは「解説」の中で Blake が Swedenborg 作品を「壮大なものの基盤である」と呼んだ、その真意の中に潜んでいる。つまり Swedenborg の著作は「壮大なもの」＝新エルサレム建築の「基盤」に相応しいと Blake は考えた。Blake のヴィジョンの中の古代イングランドには、エルサレムがあった（*Milton* “Preface”）が、今やそのイングランドは「暗い悪魔のような工場」囲まれている。「わたしは心的戦いを止めはしない」再び「イングランドの緑で楽しい土地に／エルサレムを建築し終わるまでは」と Blake は書いた。Blake の「古事物愛好主義」的ヴィジョンには「黙示録」的側面が確実に存在することが明らかとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 鈴木雅之	４．巻 XIV
２．論文標題 「幻想的な黙想」ーーブレイクの古事物愛好主義的想像力	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『英文學研究、支部統合号』	６．最初と最後の頁 139，147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木雅之	４．巻 15
２．論文標題 「幻想的な黙想」― ブレイクの古事物愛好主義的想像力	５．発行年 2021年
３．雑誌名 関西英文学研究	６．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木雅之	４．巻 第６号
２．論文標題 "foundations for grand things"――ブレイクとスヴェーデンボリ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東北ロマン主義研究	６．最初と最後の頁 39-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木雅之	４．巻 第43号
２．論文標題 幻の古代ブリトン人	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本ジョンソン協会年報	６．最初と最後の頁 2－5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木雅之	4．巻 第4号
2．論文標題 「起源」の不在――ブレイクの《古代ブリトン人》を読む	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東北ロマン主義研究	6．最初と最後の頁 35，50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 鈴木雅之
2．発表標題 古事物愛好主義（Antiquarianism）の系譜
3．学会等名 日本ジョンソン協会
4．発表年 2021年

1．発表者名 Masashi Suzuki
2．発表標題 Swedenborgian “Science of Correspondences”: William Blake and D. T. Suzuki
3．学会等名 Global Blake（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 鈴木雅之
2．発表標題 ブレイクとスヴェーデンボリ――《霊的訓戒者（The spiritual Preceptor）「解説」を読む
3．学会等名 第13回東北ロマン主義文学・文化研究会
4．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 鈴木雅之	４．発行年 2019年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 320
３．書名 第一章「見えざる世界の証明」―スヴェーデンボリ、ブレイク、エマソン（吉川朗子、川津雅江編『トランスアトランティック・エコロジー―ロマン主義を語り直す』）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関